

【高等学校の部】 最優秀賞

きっと届く

別府溝部学園高等学校 2年
野中 香陽



「ふるさと」という言葉は私にとってあまり縁のないもの。なぜなら、私は祖父母と暮らしており、もう片方の祖父母は近くに住んでいて、特に「帰省」するということを意識したことがないからだ。その言葉は、まだ十六の私には、しっくりくるものではなかった。

でも「ふるさとと自然」と考えると思いつくものがある。それは、宇佐市の院内町という場所だった。

私にとって院内町は大切な場所である。そこは、ひいおばあちゃんに会える場所であった。そして親戚の集まる場所でもあった。

院内町には大きなショッピングモールなどなく、遊ぶ場所などなかった。自然が豊かで、山の中にポツポツと家がある場所。耳を澄ませても車の走る音はなく、鳥や風の音しか聞こえない、テレビや映画に出てくるような「田舎」だった。そんな場所をどうして私は好きだったのだろうか？空気がおいしいからではない。単純に、親戚が集まる場所だったからだ。親戚が集まるということは、お年玉がもらえるという事。小学生の私は、そんな子供らしい理由で、この場所が好きだったのだ。高校生になった今は、それ以外の理由がある。もう会うことも話すこともできない人が住んでいた思い出の場所だからだ。

私が小学校5年生の時に、ひいおばあちゃんは病気で亡くなってしまった。ひいおばあちゃんと最後に話したのは、院内町にある家ではなく、病院だった。あの家で最後に話したのは何の話だったのか、もう思い出すことができない。

ひいおばあちゃんは私と会う度、お小遣いをくれた。最後の最後まで。しわしわの手でくれた千円。あの時ちゃんと「ありがとう」と伝えることが出来なかった。伝えたいのに。伝えなきゃいけないのに。

あの頃に比べて成長した今、ありがたみと大切な存在であったこと、改めて知る。だんだんとひいおばあちゃんとの記憶が薄れているなか、一つだけ、これだけは忘れないもの。それは、真っ赤で酸っぱい梅干し。

私たち家族と親戚が帰ってくるのに合わせて、たくさんの唐揚げにオードブル、お酒とジュースが机いっぱいあった。その中に真っ赤で一際目立つ梅干しがあった。毎年沢山の梅干しをひいおばあちゃんは作っていた。その梅干しは思わず目をつぶってしまうほど酸っぱかった。また食べたい。目をつぶらず食べてみたい。きっと目をつぶってしまうけど。

もしひいおばあちゃんが、近くで見守ってくれていたなら伝えたい。

ありがとう。ひいおばあちゃんの顔、しわしわの手、真っ赤な梅干し。どんなに時間がたっても絶対忘れないよ。あなたのひ孫でよかったです。今度お花持って会いにいくな。そう伝えたい。